視点・論点②

〈3・11〉脱原発アクションの成功をステップに、さらなる再稼働反対行動へ！

天野恵一

〈3・11原発震災〉から一周年の日、私たちは、私たちも参加している「福島原発事故緊急会議」が呼びかけてつくられた「再稼働反対！全国アクション」に結集し、国会を「ヒューマン・チェーン」で包囲するという抗議行動に全力で取り組んだ。そこには、私たち主催者の予想をまったくオーバーする一万人を超える人々が参加して、右翼の脅迫、警察の「無法」のいやがらせ（国会添いの歩道からは締め出し、道路をへだてた外側の歩道しか使用させない）に、強く抗議して、キチンと「包囲」を実現し、国会正門前での集会もにぎやかにつくり出された。福島現地での「原発いらない！3・11福島県民大集会」へも、バスをくり出して私たちの仲間は参加しており、東京での集まりがこれほど大衆的なものになるとは、正直、だれ一人も予想していなかったと思う。

とにかく、その点は大成功であった。

全国で稼働している原発は五四基中二基のみという状況で、三月二六日には東京電力柏崎刈羽6号機が、五月五日には北海道電力の泊3号機も定期検査入りし、全原発が停止される状況が現実のものとなる。私たちは全原発停止から全原発廃炉（原発ゼロ！）との声をあげ、「安全」神話（崩壊したそれをストレステストというインチキな手続で）を再生させ、再起動へと向かっている野田政権に正面から対峙する抗議行動を多様に作り上げてきた。〈3・11〉は、それの集約的な闘いの日であったのだ。

国会包囲行動の後に行なわれた首相官邸への要請書提出行動で読み上げられた「ハイロアクション福島原発40年実行委」の要請書にはこうある。

「あの日から1年の月日が過ぎました。／私たち福島県民は、それぞれが深い想いを胸に抱きつつ、新しい一歩を踏み出す日です。／しかし現実はどうでしょうか。総理は昨年末に、福島原発事故収束宣言をされましたが、私たちは『何ひとつ終わっていない』と感じています。／余震による、更なる原発の事故を恐れ、失ったもののあまりの大きさに呆然とし、人々の分断がすすむ状況を、心から悲しいと思う日々です。／私たちは要求します。／1、一刻も早く、放射能の流出を食いとめるために、あらゆる努力を行うこと。／2、放射能被曝を可能な限り減らし、健康で文化的な生活を営む私たちの権利を保障すること。／3、国民の安全が確保できないにもかかわらず、国策として原子力政策を推進した責任を認め、謝罪・補償を行うこと。／4、日本のすべての原子力発電所を停止し、再稼働せずに廃炉にすること」。

まったく、まっとうで、しごく当たり前な要求である。

この日、こうした当たり前の多くの人々の要請を踏みにじって、原発再稼働さらには原発輸出へも動き出している野田政権は、政府主催の追悼式典を政治的に演出した。そして、あの原発翼賛マスコミは、またもやこぞってこの国会儀礼を大々的に報道し、二時四六分の黙祷「挙国一致共同体」づくりには全面的に協力してみせた。儀礼の中心には、8・15追悼儀礼同様、天皇（夫妻）が座った。

野田も天皇も、被災地（者）を気づかった言葉を吐き、「復興」への願いを口にし、おごそかに追悼の気持ちを表明してみせた。

大量の死傷者（被曝によって未来の死が約束されてしまった、あるいはしまうであろう数を合わせたら、それは信じられない数であろう）をつくりだした原発づくりを国策として推進してきた戦後天皇制国家の〈象徴〉と現在の首相が、こういうおためごかしの欺瞞の言葉を吐き続ける状況。こうした状況に抗して、私たちはさらに再稼働予定原発立地と結んだ、具体的な反再稼働の行動へ立ち上っている。〈怒り〉を行動へ！　共に！

（あまの　やすかず／反安保実行委員会）